

## 商機と熱気のミャンマー・パート2

ミャンマーにて 肥後 照雄



三回目のミャンマー出張である。第一都市・ヤンゴンには、連日 30 度前後の真夏日が続いていた。今日、関東でも雪が積もったというニュースが届いた。平塚でも朝方には気温が零度以下まで下がり、外の水溜りには薄氷が張った日もあった。(写真；寝釈迦像)

当地は半袖、エアコンが効いているオフィスやホテルの部屋では肌寒いくらいである。まさに別世界・別天地である。しかし、初めて当地に足を踏み入れた昨年 9 月に比し、日中でも日差しはどことなくやさしい。刺すような紫外線ではない。しかも朝晩の気温は 20℃前後に下がり、爽やかで心地よい風が頬をなでる。それに誘われてか欧米からの観光客も多く見かける。“黄金のシーズン”とはよく言ったものである。

今回の出張目的は、私がアドバイザーをしている P 社製品の輸入代理店候補の絞り込み、契約内定の取り付けである。今まで 2 回訪問し、商品の説明、デモ後の商談した企業の中で、商品に強い関心と興味があり、市場・顧客開拓をしてくれそうな企業を再訪して決定することであった。今回でその所期の目的はほぼ果たせそうである。足蹴に通うことで“黄金”より大事な企業と人との“信頼関係を築く”のは、世界共通のビジネスの基本である。

ヤンゴンからマンダレーに移動する国内線空港待合所では、周りに日本語が飛び交っていた。殆どの人はスーツ、ネクタイのビジネスマン風、外交官、行政関係、または調査や研究関係者、大学教授のような人を多く見かけた。どうも観光客ではなさそうだった。だが、行き先は第二の商工業都市・マンダレーではなく、どうやらバガンやその他地方に行ったようだ。当国への日本の投資は、なかなか進まないようである。「NATO(NOT ACTION TAKING ONLY 行動しない口先だけ)」と揶揄されるように、様子見や企画段階の企業が多い。投資額では、香港、英国、韓国、シンガポールとマレーシアから水をあけられているのが現状だ。現在、最大投資国は中国、次いでタイが 2 番目だが日本は投資額では第 11 位に過ぎない。我々窓口であり私と同じ元 S 社 OB は、当地が気に入って 17 年住み着いている。彼は、“今のところ日本企業はミャンマーの繊維業と産業などに進出している。だが、他の業界に投資するため、調査や相談に訪ねてくる人も増えている”と言っていた。空港で見かけた沢山の日本人はこれらの関係者かもしれない。

今年日緬国交樹立 60 周年を迎える節目の年である。我が国は、先の大戦で壊滅的な打撃を受け食料難にあえいでいた。そんな時、積極的に米をおくり援助してくれたのは、当時アジアで GDP 最上位を誇っていたビルマだった。様々な経緯や背景はあるが、1954 年戦後の賠償の放棄に最初に応じてくれたのもこの国で、同年に平和条約が締結された。未だに政治的プロパガンダに利用し、事あるごとに難癖をつける隣国とはえらい違いなのだ。日本がそんな昔から緬国から恩義をうけていたとは、恥ずかしながら私は知らなかった。日緬 60 周年、昨年を上回る規模の経済プロジェクトと人的交流を行い、日本は恩義に報いるべきである。

アウンサン・スーチさんの著書「希望の星」の中で、敬愛するミャンマーのウー・バンデッタ大僧正の言葉を記している、「人間、努力し過ぎることはあるが、自戒し過ぎることは決してない」と。ダムや港湾の大型プロジェクトを契約した投資ナンバーワン国は、ワーカー、エンジニアは勿論、材料や機材を持ち込み、なんと資源を含んでいる掘り起こした土まで本国に持ち帰る。緬国の雇用創出や消費拡大につながっていないと緬国友人は嘆いていた。我々はそれを教訓に単に儲けや利権を求めるだけでなく、未だ義理・人情・恩義が通じる緬国に「自戒」の念を肝に銘じて付き合っていきたいものである。(完)